

エネルギーを 学ぶ・伝える・考える



全校をあげてごみ拾い。ごみは種類別にカードにチェック。新潟市のGIGAスクール構想で1人1台支給されたタブレット端末で撮影し、記録をとる

新しい海の学びを支援する 教育プログラム

「今、教育には断片的な知識ではなく、集めた情報を自分なりに解釈して取捨選択し、身の回りの問題を解決していく力が求められています」と話す岡本校長。想像力や問題解決能力、社会性を持った「人間としての力」を持つ子どもたちを育てるため、学校生活のさまざまな場面で、一人ひとりが自信を持って取り組む環境をつくることを大切にしています。

同校は、昨年度から2年間、「海洋教育パイオニアスクールプログラム」に選ばれました。日本財団と笹川平和財団などが主催するプログラムで、海洋に関する新しい学びに取り組む学校を支援しています。この助成金を活用し、4年生が行う「大好き新潟、見つめよう真砂の自然・守ろう自然環境」の学習活動を充実させてきました。子どもたちは、真砂の海と海辺の環境を再発見するとともに、その環境を守っていくための課題を見つけ、解決策を考えていきます。

地域を見つめ、持続可能な 社会のつくり手を育むESD

4年生75人が参加する「大好き新潟、見つめよう真砂の自然・守ろう自然環境」。2年目を迎える今年は、さらに内容を深められるよう、担任の先生3人が活動計画を立てました。主に総合的な学習の時間を活用しますが、その学びは教科の枠を越えて相互に関連しています。例えば、社会科の「水はどこから」や「ごみはどこへ」、国語の「聞き取りメモの工夫」や「情報の要約」、道徳の「琵琶湖のごみ拾い」など。教科横断型のカリキュラムで進める活動は、地域の課題を自らの問題として捉え、身近なところから問題解決に取り組む* ESD(持続可能な開発のための教育)です。

活動の始まりは、春の海。砂浜でごみを観察します。そこで外国語のラベルのごみを見つけました。主任の小林泉先生は、「子どもたちは浜に遊びに来た人がごみを捨てていると予想していました。海の向こうから流れ着いたごみもあるのではないかと考えました」と話します。

* Education for Sustainable Development の略

美しい海と砂浜を通して アイデンティティを育てる

新潟市西部に位置し、414人の子どもたちが学ぶ新潟市立真砂まきご小学校。15分も歩けば砂浜に着くほど海に近く、校舎から日本海や佐渡を望むこともできます。開校したのは、1972年。戦後、新潟市の発展とともに砂丘地が住宅地として開発された地域で、以前はほとんど人が住んでいませんでした。そのため、比較的歴史が浅く、町の象徴となる史跡や地域の祭り、地場に根付いた産業はありません。

岡本泰子校長は「3年前に赴任した時、PTA会長さんや地域の方と『地域の良さを見直して、子どもたちのアイデンティティを育てていきたいですね』とお話しました」と振り返ります。そこで、真砂地区の特徴を考えた時、「美しい海と砂浜」に思い至りました。学区内には、小針浜海水浴場もあります。

「本校では、26年間、学校行事として海岸清掃を続けてきました。それを恒例で終わらせるのではなく、地域や環境について考えるきっかけにしたいと思いました」。

訪れた場所

新潟市立真砂小学校

新潟県新潟市西区真砂3丁目24番1号



お話を伺った岡本泰子校長先生(上)と、小林泉先生(右)





4. 7月2日、ごみ拾い後の浜がどうなっているか訪れた後に書いた日記。子どもたちの環境への意識の高さが伺えます
5. 海岸清掃の直後に制作した新聞。1枚では収まらず、2枚書いた子どももいたそうです
6. ポスターを額に入れ、病院や保育園、パン屋など、地域のお店や施設に掲示を依頼。喜んで受け取ってもらえることが多かったそうです



1. 全校でのごみ拾いで見つけたごみについて、参加した新潟海上保安部の職員の方から説明してもらいます
2. 役割分担しながらごみ拾いを実施。燃えるごみ57袋、燃えないごみ15袋と膨大な量のごみが集まりましたが、2年前と比べるとかなり減少しており、社会の意識の変化を感じているそうです
3. ごみを種類別に集計。本やテレビで見た環境問題を、自分ごととして実感できました

海岸清掃を通してごみの種類や数を調査し、現状を認識する

海岸清掃の前に「今、世界の海でどんな問題が起きているのか」図書館の先生に本を集めてもらい、調べました。さらに、海洋ごみを取材したテレビ番組を見ることで、世界中の海が自然に分解されることのないプラスチックごみに汚染され、海にすむ生き物を傷つけたり、命を奪ったりしていることを知りました。

「現状を認識して、子どもたちはショックを受けていました。それだけに、『絶対に真砂の海をきれいにしたい』と、海岸清掃に対する意欲が高まりました」。

例年、海開きを前に6月に行われてきた海岸清掃。昨年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で4年生のみの参加でしたが、今年は全校児童と先生たち、新潟海上保安部の方々も参加して行われました。4年生は、事前に決めた役割(ごみを拾う・撮影する・集計表に記録するなど)のもと、清掃と調査を進めました。その日、集めたごみは全部で約155kgにもなったそうです。

課題解決に向けて、自分たちができることを考える

「この学習の大切な点は、子どもたち自身に『真砂の海をきれいにしたい』と思ってもらうことです。活動を進めながら、そういう気持ちになってくれるまで待ちました」と小林先生。海を守るため、自分たちに何ができるのか。グループごとにアイデアを出し合い、海水浴シーズンまでに地域の方々や小針浜を訪れる人々に向けて、海の環境保全を呼び掛けるポスターを作ることにしました。

制作するポスターは、グループごとに2枚ずつ。そして、取り組み始めた7月、4年生はもう一度、小針浜を訪れました。海岸清掃を終えて約1カ月後。同行した小林先生は「ごみも少なく、お天気も抜群。空と海の青と白っぽい砂浜のコントラストが本当にきれいでした。あの時の印象が強くて、きれいな海と汚い海を対比させたいという子が多くなったほどです」と言います。その分、子どもたちは海水浴客が残すごみを心配し、ポスターの制作にも熱が入りました。

調査結果を整理・分析し、新聞にまとめる

海岸清掃の後、グループごとに記録した内容をもとに、自分たちが拾ったごみを種類別に集計しました。その統計をグラフで表すと一目瞭然。圧倒的にプラスチックごみが多かったそうです。さらに、ごみの中には外国語のラベルのものも多く、外国で捨てられたごみが真砂に流れ着いていました。「それは、逆に、真砂で捨てたごみが、はるか遠い外国に流れ着くということでもあります」と岡本校長。子どもたちは、自分たちが暮らす地域が世界と繋がっていて、真砂の海もマイクロプラスチックに汚染されていることに気付きました。

その後、海岸清掃や調べ学習を通して分かったことや考えたことを他の人に伝えるため、1人1枚の新聞にまとめました。小林先生は、「自分たちもごみを出さないようにしましょう」という感想が少しずつ見られるようになって、社会科で学びリユースやリサイクルに興味を持つきっかけにもなりました」と話します。

地域の人たちとの繋がりが子どもたちの学びを後押しする

完成したポスターは、地域の施設やお店に張り出してもらいます。その場所の選定も、子どもたちが中心になって行いました。実は、子どもたちは3年生の時、真砂地区や学校の歴史を学び、社会科の「まちたんけん」で地域のさまざまな施設や場所を訪ねました。「その経験を生かして、子どもたちがお願いする施設を考えました。昨年学習したことをもとに、今の課題を解決することは、総合的な能力を伸ばす意味でもとても大切なことだと思えます」と岡本校長。

病院や郵便局、コンビニエンスストア……。子どもたちは完成したポスターを持って、施設やお店を訪れ、意義を説明しながら手渡しました。小林先生は「自分たちの活動が認めてもらっていることを直に感じて、子どもたちは凛々しく、たくましくお話ししていました。『小針浜のために良いことをした』という思いが少しでも残ってくれば、次に続くかなと思えます」と振り返ります。

砂防林に親しむことで 海と生きる地区の歴史を知る

「身近な海と海岸は、単に見て美しいだけではなく、私たちの生活とは切り離せない関係にあります」と岡本校長。

昔の真砂地区は、川などの水源もなく、海風による飛砂の影響で、居住や農業に向かない土地でした。そのため、住宅地として開発される時には、砂を防ぐさまざまな取り組みが行われたそうです。

そのひとつが砂防林です。新潟市の海岸線は約60km。江戸時代から植林が始まり、今では約1000ヘクタールにもなりました。同校の学区内にも住宅地を飛砂から守る松林「松海の森」があり、砂防林を学ぶ学習も続けています。

4年生は半日ほどかけて、砂防林を守るボランティアの方々から、砂防林の目的や歴史、木の種類、普段の手入れなどを教えてもらいます。その後、下草を取り除くお手伝いやネイチャーゲームなどを通して、海辺の自然に親しみながら、海と生きてきた地域の歴史や人々の知恵を学びます。

地域の魅力を再発見し、 故郷や自分への自信に繋げる

「初めて校舎4階の廊下から見た景色を今でもはっきりと覚えています。微妙に色を変えながらきらきらと輝く日本海、そしてその向こうに美しい稜線の佐渡が思いのほか大きく見えたのが印象的でした」。赴任して1年ほど経った頃、岡本校長が「真砂大好き！」と題して発行した学校便りの一部です。

同校は今年、創立50周年を迎えます。昨年はこれまでの環境保全活動が実を結び第25回新潟県環境賞大賞を受賞しました。長期的な目標は、海岸清掃を契機に身近な自然を調べ、情報発信することで、地域のアイデンティティを再発見し、地域愛を高めることです。「日本の子どもたちは自己有用感が低いといわれるが、自信を持ってほしいし、自分にも家族にも地域にも誇りを持ってほしい」と岡本校長。今後は、4年生の学習を発展させ、地域の発展のために、高学年の子どもたちがどんな提案ができるのかを考える單元開発もしたいと話してくださいました。



10



8



7



9

7. 「松海の森」にて、木に絡みついたつる草の除去や植樹体験を通して、砂防林に親しみました
8. 50周年記念事業で、ピオトープを整備。メダカ池もきれいに清掃されました
9. 地域の優れた環境保全活動を表彰する新潟県環境賞で、大賞受賞時に贈られた表彰状
10. 小針浜の休憩施設「なぎさふれあいセンター（ゆうやけこぼり）」でポスターを掲示。アンケート箱も設置しています